

まえがき

コロンビアの美^{コスメティツク}容整形——本書では「宇宙整形^{コスミツク}」と呼ぶ——が話題になる際に、どうして患者の死や身体損傷がこれほどまでに好まれるのだろうか。この疑問を通して、本書『美女と野獣』は暴力と美の関係性について検討する。今日私たちを取り巻く世界では、性的魅力と恐怖が手を携えて存在しているのみならず、相互に力を高めあってさえいるからである。

したがって、この問いについて私がおとぎ話調で書くことを選んだのは、現実やそれが持つ美の躍動をないがしろにするためではなく、むしろ強調するためである。というのも、恐怖の核心には強力な美学があるのではないだろうか。喉をかき切る民兵、たちの悪い麻薬密売人^{ナルコ}、ストリートギャングはありうるすべてのルールをあざ笑っているが、その姿は魅力にあふれていないだろうか。民兵やナルコのおなじみの華々しいイメージにはカリスマ性と憎悪が入り混じるが、このイメージ

は彼らの携えている美女や美しい馬、ずらつと並んだ荘嚴な黒のSUV車といったものと調和している。スラム街にいるギャングは当然そこまで洗練されているわけではないが、彼らは自らのモーターバイクと夢を持ち、同じように身体切断という凄惨な技術の恩恵を受けている。とはいえ、言葉遣い、髪型、服装や着発式手榴弾で新しいことを生み出すことにかけては、むしろトップにいる本当に悪い奴らよりも長けていることが多い。

こうしたことのもどきままでが真実で、どこまでが幻想なのかを問うことは、まったくもって正当である。ただしそれは、真実と幻想が耐えがたいほどに混ざり合っていることを前提として引き受けた上での話だ。そしてここに、私たちがみな知っていたものに対して、さらには自分が知っていたということをしらなかつたことに対して、注意を払うべきもう一つの理由がある。すなわち美学は、豊胸、フェイスリフト、脂肪吸引による痩身と同じように、屈強な男たちや国家にとっても重要であるということだ。警官といえ、ヘルメット、防弾ベスト、マシンガン、黒光りする対暴徒用装備、ヘリコプター、点滅灯、けたたましいサイレン、催涙ガス、さらには馬といったイメージや音が連なりとして浮かんでくる。こうしたイメージや音は、私たちが「実用的」とか「実利的」とか呼ぶ事柄と同じくらい、間違いない美的な理由で選択されていることを示している。実際、あらゆる「実用的」なものの中に、美学を具体化していないものなどあるだろうか。

私の考えでは、こうした美学と恐怖、および美学と実用の絡み合いは、ナルコルックを中心にし

て展開している。ナルコルツクの手本となっているのは、とんでもない大金持ちである麻薬商人や彼らの無法なライフスタイルに、現在加わっているか、あるいは加わりたいと願っている若い女性たちである。彼女たちのイマーゴ——シリコンを入れた乳房、ヒップアップした尻、脂肪吸引による痩身——が、ファッションと美^{ビュティフィケーション}形^ン化を急成長させたのだ。この流行は、男と女のエネルギーと幻想を吸い上げているだけではなく、より一般的に身体について雄弁に示している。すなわち、労働と規律の代わりにスタイルと逸脱と過剰な官能性を選んだ生き方を象徴し、媒体となつていゝ身体についてである。これと同じ美学が今や世界を席卷し、戦争や拷問や身体切断を引き起こしている。そして、「消費」という語で簡単に片づけられてしまつていゝものの中に休息を見出そうとじている新しい資本主義経済の狂乱もまた、この美学によつて生じていゝのだ。コロンビアだけの話ではないし、コロンビアに特有な話でもない。ただ、コロンビアでは他国よりもあからさまなだけである。

悪い奴やいい奴、さらには美しい女や馬やSUV車についてはこれくらいにしておこう。地下組織についても、国家による弾圧を実行する警察についてもこれくらいにしておこう。どうしたら、これらの驚くべき混合体——それはまさにさまざまな要素を混ぜ合わせたものであるが——について、その混合体が生み出す魔術的なアウラと同じくらいに、美学が重要であると考えることができるだろうか。そうであるとすれば、私の扱うさまざまな物語、すなわち宇宙整形に続いて生じる悲劇的結末の物語は、どうなるのだろうか。

ウィリアム・バロウズは、『ゴースト』のなかで「美しさはつねに呪われている」と書いている。どうして、美はそんな風に揺らめくのだろうか。